

## 2016年度 カンボジア 現地活動報告書

2017年 2月5日～18日

プノンペン州、シェムリアップ州、コンポントム州



4年生 市川舞夏、大久保佳織、大塚桃香、村瀬朱里、森田遼太郎

2年生 安部和佳奈、小川龍星、小田嶋優花、谷内うらら

---

## 目次

目次.....	2
PART 1 はじめに .....	4
団体紹介 .....	5
これまでの活動 .....	6
お世話になった方々 .....	7
カンボジア基礎情報 .....	9
トム・オー村（活動先）基礎情報 .....	10
トム・オー小学校が抱える問題 .....	13
プロジェクト概要 .....	14
PART 2 トム・オー村 .....	15
現地スケジュール .....	16
建設業者・先生との話し合い.....	17
子ども向け授業 .....	22
大人向け相談会 .....	29
運動会 .....	36
PART 3 シェムリアップ・プノンペン.....	41
ソパートさんの日本語学校 .....	42
PHARE THE CAMBODIA CIRCUS .....	43
アンコールワット .....	44
ベンメリア遺跡、トンレサップ湖 .....	45

イオンショッピングセンター、プノンペン大学交流会 .....	46
石原舞さんとの再会.....	47
齋藤海妃さんとの出会い .....	48
タヤマ日本語学校 .....	50
くっくま孤児院 .....	51
PART 4 メンバーの感想 .....	52
村瀬朱里 .....	53
市川舞夏 .....	56
大久保佳織.....	58
大塚桃香 .....	61
森田遼太郎.....	63
安部和佳奈.....	66
小川龍星 .....	68
小田嶋優花.....	69
谷内うらら.....	71
PART 5 おわりに.....	73
今後の展望.....	74

# PART 1 はじめに

## 団体紹介

私たちは麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力（IEC）専攻4年生5名、2年生4名、今年度新たに加わった1年生9名、合計18名で活動しているカンボジア国際協力団体Plas+です。「プラス」と読んでください。

Plas+とは“Present love to all students”の略で、“すべての子どもたちに愛を”、をモットーに活動を行なっています。

映画『僕たちは世界を変えることができない<sup>1</sup>』に感化され、「私たちもカンボジアで何かしたい!」と入学してすぐ、2014年4月26日に団体を発足しました。

現在は、一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）<sup>2</sup>が、小学校建設の際に資金援助したトム・オー小学校を拠点地とし、様々な活動を展開しています。

---

1

『僕たちは世界を変えることができない but we wanna build a school in Cambodia』

葉田甲太さんの体験記が原作となった、向井理さん主演のノンフィクション映画。ひよんなことをきっかけに、医大生4人が、カンボジアの子どもたちのために学校を建設しようと奮闘する青春ストーリー。Plas+では、新メンバーが入ってくると、まずこの映画を一緒に観ることにしている。

2

一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）

発展途上国において文化・経済の発展に協力するため、国際協力活動を通じて、世界の平和、人類の安心と幸福増進に寄与することを目的として、主にネパール・タイ・ラオス・カンボジアにおいて援助活動を行なっている。

---

これまでの活動

## これまでの活動

結成1年目は試行錯誤をしながらカンボジアや国際協力について学習し、私たちに出来ることを探しに初めてカンボジアを訪れました。そこではカンボジアの実情と国際協力の難しさを痛感し現実に打ち拉がれてしまいました。

それでも出来ることを探す為に活動を続け、2年目からは自主企画ゼミナール<sup>3</sup>として申請し、大学にも認知される団体となりました。

そして、担当教員である麗澤大学外国語学部教員の内尾太一先生とともに、インタビューリレーという活動を始めました。

インタビューリレーとは、カンボジアに詳しい専門家やゆかりのある方を訪ね、インタビューを行なうというものです。

インタビュー協力者のカンボジアにまつわるエピソードや、カンボジアでの国際協力についてお聞きし、また、学生の私たちに出来ることは何か、アドバイスを頂くというものです。

これまで16名の専門家にインタビューを行ない、様々な意見やアドバイスを頂きました。その中で私たちが考案したものが出前授業<sup>4</sup>でした。

---

3

### 自主企画ゼミナール

麗澤大学内の授業形態の1つで、既存の枠組みにとらわれず、より多く学びたいという意欲的な学生、並びに主体的に学習計画・学習内容を提案したい学生のための科目。

4

### 出前授業

メンバーが担当教科を持ち、先生となって授業を展開するというもの。これまでカンボジアでは3校の小学校で6教科（科学・言語・体育・交通安全・夢・日本文化）の授業を行なった。国内では南三陸町の塾や都内の高校でカンボジアの良さを広める出前授業を行なった。

これまでカンボジアには4度訪れており、その度に出前授業を行ない、国内でもカンボジアの良さを伝える出前授業を展開しています。

## お世話になった方々

### 【日本】

- \* 木下廣太郎さん：トム・オー小学校建設〈一般財団法人麗澤海外開発協会RODA〉
- \* 林真市さん：航空券手配〈株式会社林旅製作所<sup>5</sup>〉
- \* ペックペックさん：翻訳〈王立ブノンペン大学日本語学科卒業生〉

### 【カンボジア】

- \* ソパートさん：ガイド・通訳（以下、ソパートさん）
- \* ソクさん：ドライバー（以下、ソクさん）
- \* ヌン・ジャンさん：村長〈トム・オー村〉（以下、村長）
- \* アムヒアンさん：副村長〈トム・オー村〉（以下、副村長）
- \* リウティナさん：校長先生〈トム・オー小学校〉（以下、校長先生）

---

5

株式会社林製作所

航空券の手配やスタディーツアーの計画を手掛けている会社で、お客様が旅行をし、その国をサポートする「旅のフェアトレード」を行なっている。航空券を申し込むと一人につき500円を、また、スタディーツアーの申し込みをすると売り上げの一部を旅した国に寄付している。

---

お世話になった方々

- \* ハイロンワイさん、スンリーさん、ボツコントロールさん：小学校の先生方  
〈トム・オー小学校〉（以下、先生方）
- \* ヴィスナーさん、サライさん：塀建設（以下、建設業者の方々）
- \* チャーチさん：アンコールワットガイド
- \* 楠美和さん、酒井恵理子さん：孤児院訪問の受け入れ〈NPO法人グローブジャングル<sup>6</sup>〉
- \* 石原舞さん：情報提供〈スポーツインストラクター〉（以下、舞さん）
- \* 齋藤海妃さん：情報提供〈麗澤大学ドイツ語学科卒〉（以下、海妃さん）

その他にも今回の渡航にあたり、多くの方々にご協力いただきました。  
この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

本当に、どうもありがとうございました。

---

6

NPO法人グローブジャングル

特定非営利活動法人 Globe Jungleカンボジアで子どもたちの未来を創るサポートを行なう団体。主に、孤児院支援や学校建設、貧困家族への就労支援を行なっている。

## カンボジア基礎情報

### 【カンボジア王国の基本情報】

**首都**：プノンペン

**人口**：1567.7万人

**面積**：18.1万km<sup>2</sup>

**一人当たりの国内総所得**：950米ドル

**公用語**：カンボジア語（クメール語）

**主要産業**：農業・縫製業・建設業・観光業



### 【近代以降の略史】

**1863年** フランスの保護国となる。

**1887年** フランス領インドシナに編入される。

**1945年** カンボジア王国として独立を宣言する。

**1947年** フランス連合内で限定独立を遂げる。

**1953年** 完全独立を獲得する。

**1970年** 親米のロン＝ノル将軍が実権を掌握する。共和制へ移行したが、内戦が始まる。

**1975年** クメール＝ルージュがプノンペンを陥落させ、実権を掌握し、民主カンボジア政権（ポル＝ポト政権）が樹立する。この間、

カンボジア基礎情報／トム・オー村基礎情報

大量虐殺が実行される。

**1979年** ベトナム軍の支援で救国民族統一戦線がプノンペンを攻略し、カンプチア人民共和国（ヘン＝サムリン政権）を樹立する。

**1982年** ロン＝ノルのクーデターで追放されていた元国家元首シアヌークらが民主カンボジア連合政府を樹立し、内戦が激化する。

**1989年** ベトナム軍が完全撤退する。

**1993年** 王政が復活し、現在まで続くカンボジア王国が誕生する。

【参考】

二宮書店編集部（2016）「カンボジア王国」『データブック・オブ・ザ・ワールド 2016年度版』pp.186～188、二宮書店。

## トム・オー村（活動先）基礎情報

【村の基本情報】

**名称：**トム・オー村

**住所：**コンポントム州サンダン群トムリン市トム・オー村

**人口：**1,493人（0～18歳 286人・18歳以上 1,207人）※2015年データ

**広さ：**約2km（縦距離）

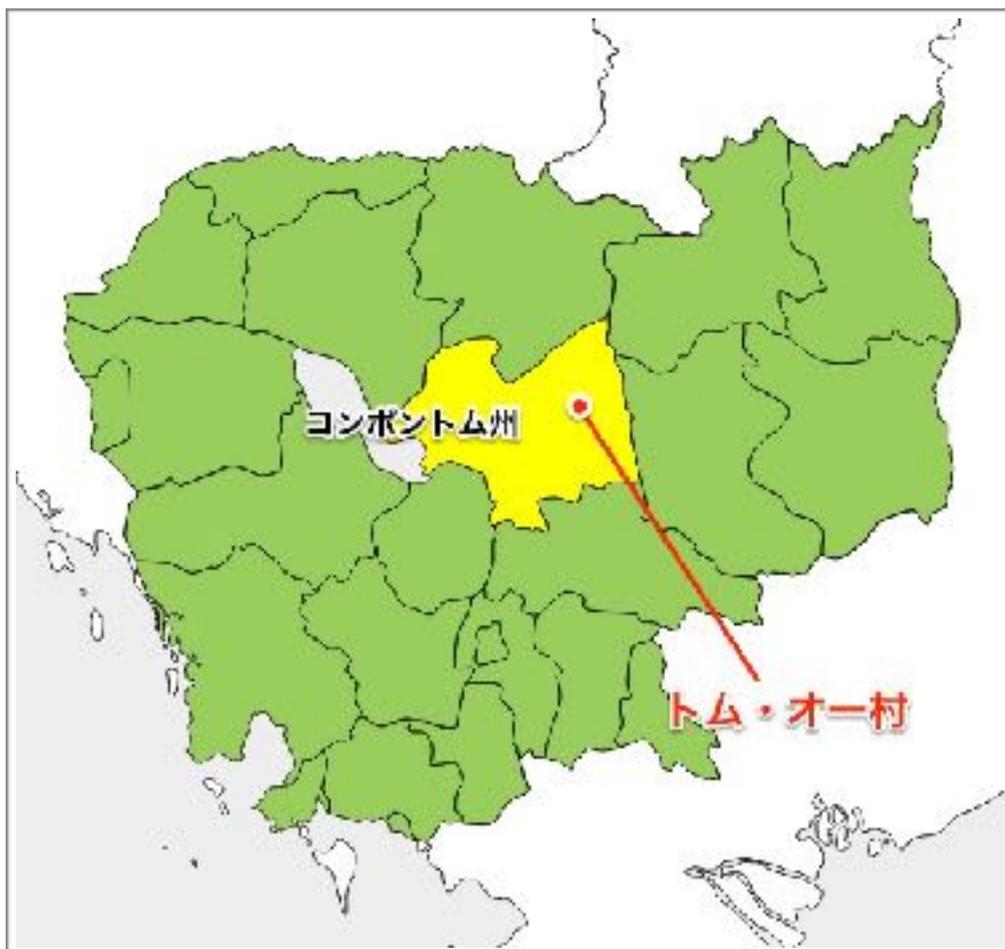
**村長**：ヌン・ジャンさん(64歳) ※2003年より就任

- \* 仕事内容：村のコントロール
- \* 選抜方法：村選挙（次回は未定）
- \* 家系：村長の親戚は政府関係者

**職業**：基本は農業と商業

**主要作物・商品**：キャッサバ、胡椒、米、カシューナッツ、ゴム

※カシューナッツとゴムは輸出されている。



トム・オー村基礎情報

【小学校の基礎情報】

**名称**：公立トム・オー小学校

**生徒**：173人（前年度より-2人） ※2016年11月データより

**校長**：リウティナ先生（28）

**教員**：4名（男性）

※学歴：高卒3名、大学中退1名

※名前：ハイロンウィ先生（24）、スンリー先生（24）

ボッコントル先生（24）

**主要科目**：数学、国語、理科、社会、体育、英語（4~6年生）

**管轄**：カンボジア政府

**広さ**：1ha（10,000㎡）



## トム・オー小学校が抱える問題

今回の渡航の丸1年前、2016年2月に行なった現地調査から、トム・オー小学校の校庭は、村人の近道として利用されていることがわかった。さらに、そのため、バイクや耕運機が校庭内に度々侵入し、子どもたちに危険が及んでいることも明らかになった。

そして、この現状は、村長をはじめ、校長先生や小学校の先生方が大変心配していることでもあった。

そこで、私たちPlas+は、トム・オー小学校に通う子どもたちが、不幸な交通事故を回避できるように、『**トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト**』を考案した。

同年11月の現地再調査では、より深くこの問題を理解するために、小学校周辺の視察を行なった。また、村長をはじめ、校長先生や小学校の先生方と話し合った結果、この現状を改善するために、小学校の四方を囲う頑丈な塀を建設する計画が持ち上がった。

塀が完成すれば、校庭内をショートカットしようとする交通の流れを変えることができる。子どもたちは、バイクや耕運機を恐れることなく、のびのびと学校生活を送ることができ、そうなれば、先生方や保護者の方々の懸念も解消されるかもしれない。

すぐに実現させることは難しいかもしれないが、小学校で行なわれている体育の授業や、私たちの行なう出前授業や運動会での安全性は、向上するはずだ。そして、最終的には、安全な学び場となったトム・オー小学校で、子どものための教育がより活発になることを期待している。

---

プロジェクト概要

## プロジェクト概要

**名称：**トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト

**問題：**校庭内へのバイク等の侵入により、子どもたちが事故に巻き込まれる危険がある。

**原因：**近隣住民が近道として、校庭内を通り抜けることが、村の日常となってしまうている。

**現状：**5分間に4～5台のバイクが校庭内を横切る。

**過去に行われた対策：**呼びかけ、簡易的な柵で道を塞ぐ（しかし、すぐに壊されてしまったという）。

**Plus+の計画：**

- ① 短期：「飛び出し坊や」を設置し、交通安全を注意喚起する。
- ② 中期：交通安全に特化した出前授業を続け、危機意識を共有する。
- ③ 長期：村の人々とともに、小学校の四方を頑丈な塀を築き、バイク等の侵入を防ぐ。

# PART 2 トム・オー村

現地スケジュール

# 現地スケジュール

	2/5(日)	6日(月)	7日(火)	8日(水)	9日(木)	10日(金)
5:00						
6:00						
7:00						
8:00	8:30 1タミ集合					
9:00			<トムオー村①>	<トムオー村②>	<トムオー村③>	
10:00	10:50 成田発					10:00 村出発
11:00				子どもたちとレク	トムオー小大運動	
12:00				交通安全教室(子ども)	交通安全教室(大人)	
13:00				村巡り		
14:00		14:00 ソバートさん	先生方とMTG			
15:00	15:40 プノンペン着	業者さんとMTG				
16:00						
17:00		コンボントム州へ				17:30 ソバートさん
18:00						学校訪問
19:00	19:20 プノンペン発					
20:00	20:00					
21:00	シェムリアップ到着					
22:00						
23:00						
0:00						

11日(土)	12日(日)	13日(月)	14日(火)	15日(水)	16日(木)	17日(金)
			6:00 プノンペン着			
						8:30 お迎え
	9:00 チャーチ合流 Ang Kor Wat観光			9:00 ヨガレッスン 博物館	タヤマ日本語学校	9:00 くっくま孤児院
		12:00 ソバートさん 合流後Lunch				
		Beng Mealea観光 トンレサップ湖観光			トゥールスレン 博物館見学	
20:00 サーカス			19:00 プノンペン大学生と 交流会			20:30 空港着
		23:30 シェムリアップ発(バス)		19:00 齋藤海妃さん とお食事		22:50 プノンペン発

## 建設業者・先生との話し合い

担当：村瀬朱里、森田遼太郎

3度目のトム・オー村訪問となる今回は、プロジェクトの最終段階である塀建設に向けて、工事を委託する建設業者の方々と小学校の先生方、そして、副村長と話し合いを行なった。

### 【建設業者との話し合い】

2月6日月曜日。建設業者の方々との話し合いは、トム・オー村に向かう前日、シエムリアップで行なわれた。お会いするのは初めてだったが、これまで現地通訳であるソパートさんを介して塀建設について情報交換をしていたため、話し合いはスムーズに行なわれた。

事前に聞かされていた建設計画を基に話し合いは進み、建設される塀のデザインをはじめ、見積もりや工法について意見を交わし合った。



建設業者・先生方との話し合い

ここで建設業者の方々とは、一緒に練ったプロジェクトについて、Plas+がトム・オー小学校で紹介し、シエムリアップに戻った際に、村の人々の反応を彼らに報告する、という流れが共有できた。



【先生方、副村長との話し合い】

先生方と副村長との話し合いは、トム・オー小学校に到着してすぐに始まった。建設業者の方々と一緒に決めた建設計画について報告をし、合意を得ることができた。また、工事が始まるまでの間、学校内にバイクや耕耘機で侵入しないこと、学校周辺では登下校する子どもたちの安全に気を配ることを、村人に浸透させてもらうよう協力をお願いした。

その際、この堀建設プロジェクトは、私たちだけで行なわれるものではなく、村全体の取り組みとなって初めて、子どもたちが事故から守られるものだ、ということを理解してもらうことが必要だった。

その点に関しては、前回の渡航での話し合いでも既に、トム・オー小学校側と私たちの中で、協力して簡易の柵を設置するなど、問題意識の共有は行われていた。そのため、このときは、改めて協力体制が整っていることを確認することが出来た。



建設業者・先生方との話し合い

【今回の話し合いで決まった建設費用】

① 柵  $572\text{本} \times \$7.75 = \$4,318.6$

② セメント  $114\text{m}^3 \times \$7 = \$798$

③ 砂  $73\text{m}^3 \times \$12 = \$876$

④ 石  $65\text{m}^3 \times \$25 = \$1,625$

⑤ レンガ  $15,000\text{個} \times \text{R}500 = \$1,875$

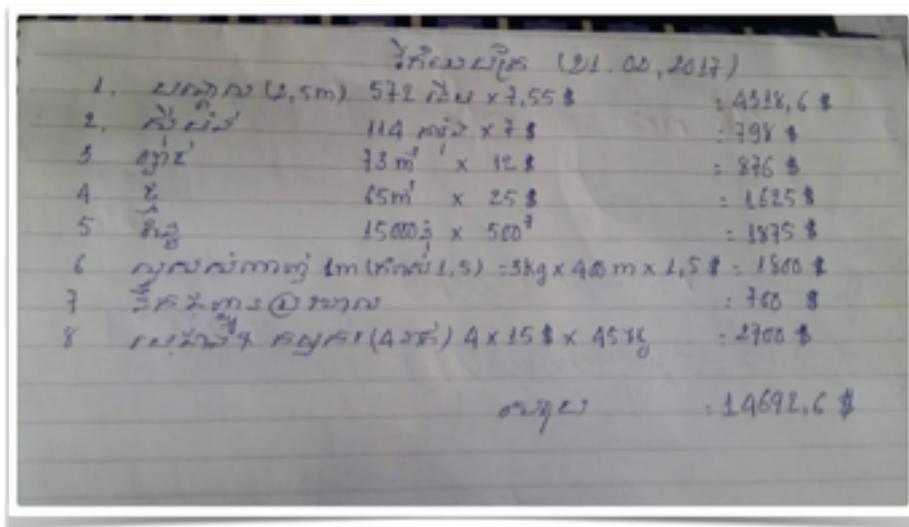
※R=カンボジア通貨“リエル” R2,000 = \$0.5

⑥ 針金  $3\text{kg} \times 400\text{m} \times \$1.5 = \$1,800$

⑦ 運搬費 \$700

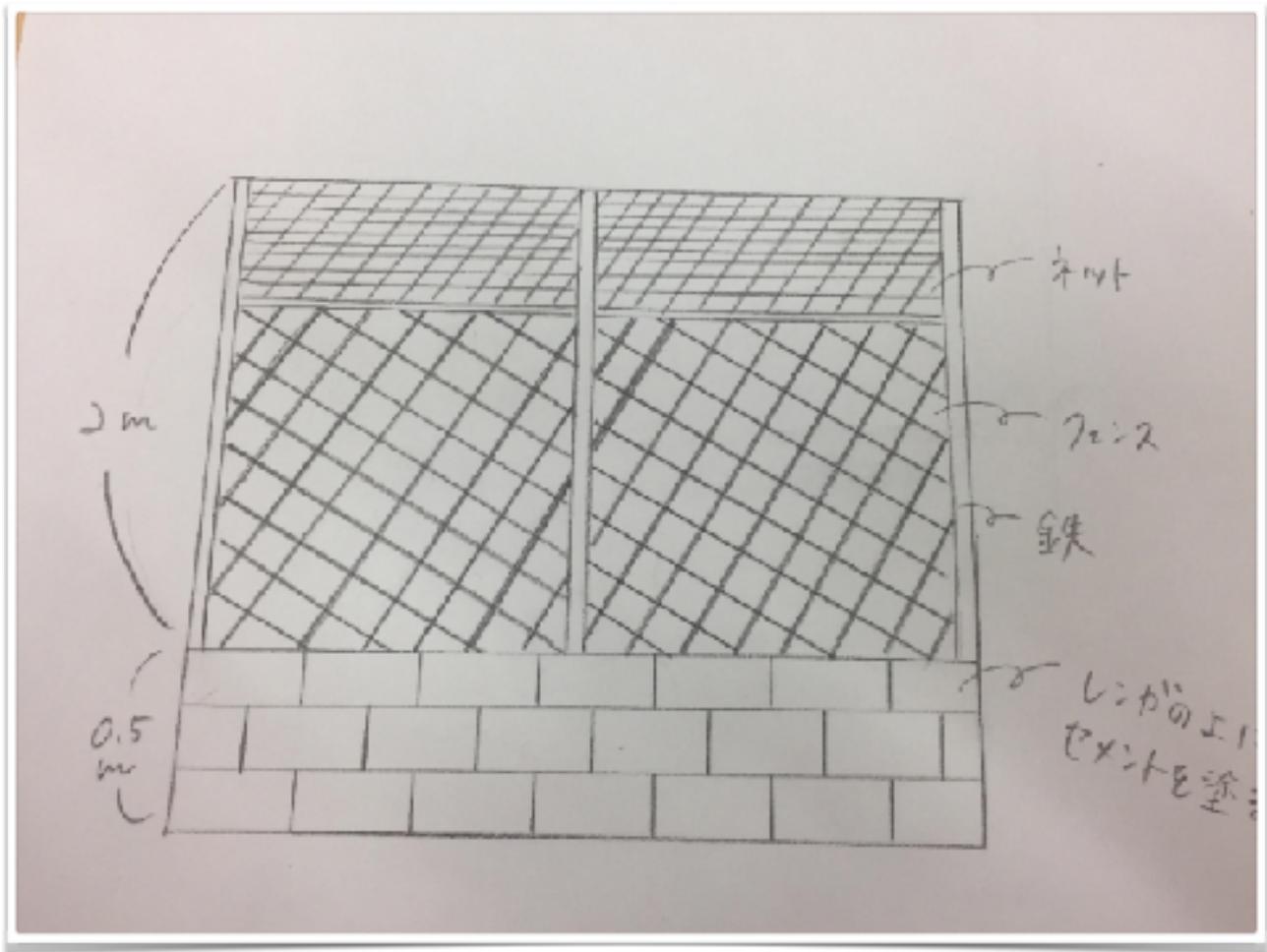
⑧ 人件費 \$2,700

**合計 \$14,692.6 (日本円で約150万円)**



【塀のデザイン】

- \* 下0.5mはレンガ作り、上からセメントで塗り固める。
- \* 建設費用を寄付、募金してくれた方にはレンガに名前が刻まれる。
- \* 完成時には、子どもたちと一緒に絵を描き、デザインを施す。



子ども向け授業

## 子ども向け授業

担当：大久保佳織、小田嶋優花、谷内うらら

### 【目的】

- ＊ 子どもたちに交通安全に対する意識を高めてもらう。
- ＊ 楽しみながら交通安全を理解してもらう。
- ＊ 塀建設を終えるまでの応急的な対策に取り組む。

### 【開催小学校】

トム・オー小学校

### 【対象学年】

全校生徒（約170人）

### 【活動形態】

出前授業 午前の部 1～3年生  
午後部 4～6年生

### 【活動時間】

2月8日 水曜日

午前 9：00～11：00

午後 14：00～16：00

（授業・休憩・『飛び出し坊や』の設置を含む）

【使用した道具】

クイズの写真（制服・交通量・通学路の標識）それぞれ2枚ずつ、紙芝居、学校周辺マップ、「飛び出し坊や」（2体）

【授業内容】

① 日本とカンボジアの違いクイズ

授業を展開する前に、まずはアイスブレイクとしてクイズを行ない、全体の注目を集めた。

日本とカンボジアの制服、交通量、道路標識を表す写真を用いて、どちらの国かを当てる内容にした。異文化体験をすると共に交通の問題も組み込み、これに続く授業との関連を持たせた。



子ども向け授業

② 紙芝居の読み聞かせ

日々の少しの心がけで、交通事故から自分の命を守ることが出来る、ということ伝えた。

紙芝居を用いた理由は、子どもたちの興味を引き、より印象に残りやすくするためであった。そして、渡航前、日本にいる間のプロジェクト準備中に、『**命を守る右、左**』と題したオリジナルの紙芝居を製作した。

また、ここで重要だと考えたのは、自分たちの口から直接子どもたちに伝えることであった。そのため、物語中の登場人物のセリフを、メンバー間で割り振り、クメール語での読み聞かせに挑戦した。ただし、その発音には少々、不安もあったため、クメール文字の字幕も用意した。

それ以外にも、最後まで集中して聴いてもらうため、紙芝居の中には、“動く”、“飛び出る”、などの仕掛けを、複数盛り込んだ。



ちなみに物語の概要は以下の通り。

「カンボジアに住むサッカー好きの男の子が、ある日ボールを追いかけて道に飛び出し、バイクとの衝突事故に遭ってしまう。怪我をして初めて、身の危険を感じた男の子が、少しずつ交通安全の意識を高めていく」

### ③ 危険を考えるワークショップ

手づくりの学校周辺マップを用いて、子どもたちに身近に潜む危険の発見と確認をしてもらった。多くの子どもたちが手を挙げ、危険箇所を発表してくれた。

このときの子どもたちの活発な発言から、彼ら彼女らが日々、交通事故の危険と隣り合わせで学校生活を送っている、ということが確認できた。



## 子ども向け授業

## ④ 「飛び出し坊や」の設置

子どもたちにはまず、「飛び出し坊や」が、日本の子どもの交通安全のために、どのような役目を果たしているか説明した（※）。

※**飛び出し坊や**とは：滋賀県発祥の、ドライバーに子どもの飛び出しを注意喚起するための交通看板である。安価でできる効果的な対策として、現代では、全国各地で定着している。また、単なる注意喚起だけでなく、可愛らしい見た目から、地域コミュニティからも愛される存在となっている「坊や」も少なくない。Plas+では、2016年10月に地元の社会福祉協議会や、飛び出し坊やの発明者である久田泰平さんを直接訪ね、国際協力のための活用の許可を得た。メンバーで調べたところ、既に中国やモロッコなど世界10カ国以上に設置されている「飛び出し坊や」だが、カンボジアで設置されるのは今回が初めてである。

今回、日本から2体の「飛び出し坊や」を持ってきたが、ただトム・オー小学校の周りに置くのではなく、子どもや地域の住民の方々に親しみを持ってもらうことが、何より重要だと考えた。

そこで、ワークショップに参加した子どもたちには、それぞれの「坊や」の名前を考えてもらった。その結果、1体は「シンチャン」に決まった。これは、日本のアニメ、『クレヨンしんちゃん』に由来すると考える。実際、「飛び出し坊や」のカラーリングは、偶然にも、主人公の野原しんのすけのものと、かなりの部分、一致している。そして、もう1体は、「ソナー」と命名された。子どもらによると、これは、現代のカンボジアで、男子に付けられる格好いい名前のひとつだという。

そして、設置の際には、“危ない！”、とクメール語で書かれた看板を付け加え、誰もが危険を予測できるような工夫をした。



## 子ども向け授業

### 【子ども向け授業を振り返って】

全校生徒に対して1回の授業を予定していたが、先生方との打ち合わせで、人数や学年を考慮し、午前中は低学年を対象に校庭で青空教室を、午後には高学年を対象に教室内で授業を行なった。

アイスブレイクのクイズでは、子どもたちは正解するたびに歓声を上げ、通学路を示す道路標識の問題では、日本とカンボジアに共通して同じマークが使われていることを伝えると、とても驚いた様子だった。

子どもたちの印象に残ることを重視した手作りの紙芝居では、学年・性別を問わず、楽しそうに耳を傾けてくれていたので、交通安全の大切さをわかりやすく伝えられた、という手応えを感じている。

子どもたちが危険だと指摘した学校の正面、2カ所への「飛び出し坊や」の設置も、首尾は上々だったといえる。子どもたちから「シンチャン」、「ソナー」という名前をもらった2体の「坊や」は、想像を超える人気を集めていた。そして、設置の際にも、子どもたちが率先して手伝ってくれた姿が、とても印象的であった。

この「飛び出し坊や」を見るたびに、子どもたちが、私たちの行なった出前授業や、ワークショップを、思い出してもらえたら嬉しい。また、日本からやってきた「坊や」たちが、これからもトム・オー村で、子どもの交通安全の象徴的な役割を果たし、村全体の交通ルールに対する意識向上に貢献していくことを期待したい。

カンボジアに来るたびに、言葉の壁を感じるが、今回はいつも以上に、それを補うような工夫を凝らしたことで、子どもたちも積極的に授業に参加してくれたと思う。しかし、それに満足してはいけない。外国語学部としての自覚をもち、子どもたちとよりスムーズなコミュニケーションを図るため、使えるクメール語のフレーズをさらに増やしていきたい。

## 大人向け相談会

担当：大塚桃香、宮崎杏

### 【目的】

- ＊ 村人から塀建設プロジェクトの承認を得る。
- ＊ 交通安全に対する意識を高めてもらう。
- ＊ 今後、村全体で塀建設プロジェクトを進めるための信頼関係を築く。

### 【開催小学校】

トム・オー小学校 教室内

### 【対象となった人々】

トム・オー村に住む大人（約20人）

### 【活動形態】

通訳を介したディスカッション

### 【活動時間】

2月9日 木曜日

午前 7：30～8：30

### 【使用した道具】

トム・オー小学校周辺の地図、ポストイット、ペン数本、模造紙、飛び出

## 大人向け相談会

し坊やの写真、アンケート用紙

### 【ディスカッション内容】

#### ① Plas+の自己紹介

プロジェクトが、村に対して、一方的なものにならないよう、村の大人向けに説明をする機会を設けてもらった。できる限り、後になって村人に反感を持たれたりしないよう、Plas+とトム・オー村の協力関係を育てることを心がけた。そのために、まず私たちの団体について紹介を行った。

#### ② 問題提起

その上で、トム・オー小学校が抱える問題、交通事故の危険性について、手づくりの小学校周辺マップを用いて、説明した。視覚的に表すことで、こちらの考えを理解してもらいやすい、と考えたためだ。また、私たちだけが声を大にするのではなく、トム・オー村の村長や校長先生にも協力をお願いし、一緒に問題の深刻さについて、村人に訴えた。



### ③ 塀建設の賛否確認

村人と、トム・オー小学校が抱える問題を共有したところで、私たちと先生方が計画している塀建設について、集まってくれた村の大人に賛否を問うた。その方法は、賛成／反対の挙手制をとった。

有り難くも、その場では、満場一致で賛成を得ることができた。もし、「反対」に手が上がった場合には、その理由や代案について考えを聞き、それをもとに、プロジェクトの再検討を行う予定だった。



### ④ KJ法を用いたワークショップ

塀建設について賛成を得られ、一安心したところで、次のステップとして、プロジェクトの今後のために、村の大人たちに助言を求めた。

具体的な方法として、KJ法（※）を参考にしながら、「学校周辺や村で交通事故の起こりそうな場所」についてディスカッションを行なった。

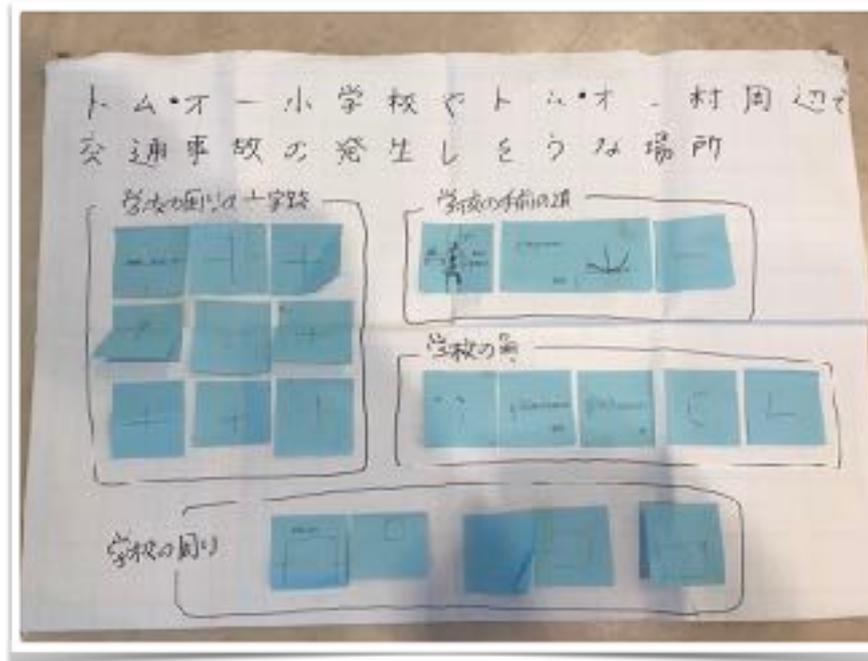
## 大人向け相談会

※**KJ法とは**：文化人類学者、川喜田二郎が考案した情報整理術。現代では、ブレインストーミングの一環として、大学の授業やビジネスシーンなど、様々な場面で活用されている。議論のテーマについて、それぞれの参加者が、ポストイット1枚につき1つの意見やアイデアを記入していく。そして、参加者から集めたポストイットの束から、似たもの同士をまとめたり、カテゴリー別に仕分けたりしながら、全員の考えを視覚化していく。そして、それを土台に、議論をさらに深めていく。



トム・オー村の大人たちと一緒にKJ法を行う中で、ほとんどの参加者が、ポストイットに字ではなく、絵や図を記入していた。なぜなら、字の読み書きができなかったからである。私たちは、ここで初めてそのことに気が付いた。トム・オー村唯一のトム・オー小学校の建設は、2008年。それより前に大人になった人々は、子ども時代に、あまり充実した教育が受けられなかった。改めて教育の大切さを実感した。また、私たちにとって「当たり前」の水準を、知らず知らずのうちに相手にも求めていたことを思い知らされた。

それでもなお、大人たちがこのワークショップに協力してくれたことには、心から感謝したい。結果として、学校の周りの十字路、学校の手前の道、学校の角、学校の周りが、危険だという認識が共有された。



それぞれの問題意識が視覚化された上で、今回、持ってきた「飛び出し坊や」も、その対策のひとつであることを伝えた。また、学校の校庭が村内の近道と化していることへのリスクについて、再度訴えた。このワークショップの最後にも、村長や校長先生に、補足の発言をお願いした。

#### ⑤ アンケート、質疑応答

事前に用意したアンケートに沿って進行したが、字が読めない人や書けない人が大半だったため、急遽口頭で集計をとった。そのアンケート内容については以下の通りである

## 大人向け相談会

- i. 本日のワークショップ全体を通してどうだったか？
- ii. 塀建設に関して本当に納得しているか？（近道が使えないことに納得をしているか？）
- iii. 前より交通安全に関する意識が高まったか？
- iv. 話し合いの進め方は適切だったか？
- v. 「飛び出し坊や」の設置は意味があるものだと思うか？

これら、5つの私たちが用意した質問に対して、こちらの想定の甘さで簡略化しなければならなくなりましたが、村人に「満足したか」、「満足していないか」の2択で、また挙手をしてもらい、意見をとった。その結果は以下の通りである。

- i. 満足20票、満足していない0票、挙手なし3票
- ii. 満足23票、満足していない0票、挙手なし0票
- iii. 満足14票、満足していない0票、挙手なし9票
- iv. 満足19票、満足していない0票、挙手なし4票
- v. 満足23票、満足していない0票、挙手なし0票

### 【大人向け相談会を振り返って】

今回、プロジェクトの性質上、大人向けの相談会は必須だと考えた。それでも、当初は、大人は仕事がある為、10名前後集まれば良い方だろう、と思っていた。しかし、その予想に反して、いざ実施してみると、教室がいっぱいになるほど（20名以上）の人が集まってくれた。

村長や校長先生が、以前から村人に向けて、私たちのことを伝えてくれたおかげであろう。その結果、たくさんの村人が集まり、賑やかな雰囲気  
で相談会を行うことができた。

トム・オー小学校の交通安全の問題について訴える私たちの姿は、村の  
大人の目には、どのように映っていたのだろうか。途中、大勢の年長者を  
前にした緊張から、メンバーが言葉に詰まる場面があったが、互いに補い  
合い、進行することができた。

ここでも、私たちの通訳をしてくれたソパートさんには、心から感謝し  
たい。また、村長や校長先生に直接語ってもらえたことで、交通安全の重  
要性について、村人たちにより共感してもらうことができたと考える。

その結果として、塀建設について満場一致で賛成を得ることができたこと  
は、プロジェクトの大きな前進となった。正直、何名かは反対するだろう  
と思っていた。近道を活用している大人にとっては、不便になるからであ  
る。想像以上の好意的な反応に驚いたのと同時に、村全体で作り上げるこ  
とができる、と確信した。

続いてのKJ法ワークショップでは、カンボジア農村での識字率の問題を見  
落としていた点が今回の反省点となった。今の大人の中には、その子ども  
時代の政治状況や経済的事情から、教育を受けることができなかつた人も  
少なくなかつたのだ。それでも、そうした参加者は、ポストイットに図を  
書いてくれていたので、多くの意見を集めることができた。

最後に行なったアンケート、質疑応答の時間にも、多くの大人の考えを知  
ることができた。アンケートに関しては、英語とクメール語で書かれた紙  
媒体のもので用意していたのだが、その場で口頭で尋ねる方法に変えるこ  
とができたので、なんとか無駄にせずに済んだ。

全体を通じて、塀建設や今後の活動におけるヒントを得られたことは、大

---

大人向け相談会／運動会

きな収穫である。塀建設はお金を集めてから着工するため、時間はかかるが、必ず建設するということを宣言した。また、その間、近道として使用されている小学校内への侵入を控えるについても、きちんと約束をすることができた。

## 運動会

担当：市川舞夏、安部和佳奈

### 【目的】

- \* 競技を通して勝つことの喜び、負けることの悔しさを体感してもらう。
- \* スポーツを通じ、同じチームメンバーと協力する大切さを伝える。
- \* 体を動かしながら日本とカンボジアの国際交流を図る。

### 【開催場所】

トム・オー小学校 校庭

### 【対象】

全校生徒（約170名）

### 【活動形態】

9チームに分かれての対抗戦

【時間】

2月9日 木曜日

午前 8:30～11:30

【必要な道具】

ゼッケン（カラーフェルト）、チームプレート、得点版、スケッチブック、  
バトン（ペットボトルやアルミホイルの芯など）、バンダナ

【運動会内容】

① 準備体操

日本で体育や部活動でよく行う準備体操（屈伸や伸脚、ジャンプなど）を、  
クメール語「モイ、ピー、バイ！」（1、2、3!）と数えながら行なった。  
体育の担当になっている2人が、全校生徒の前に出て、お手本を示した。



② 借り物競争

あらかじめスケッチブックにお題を記入し用意し、（例 校長先生、黒板

## 運動会

消しなど) 各チーム2人組のペアを作り競争した。

具体的な流れは次の通り。はじめに、競技者以外の子どもたちに、お題を見せ、全員把握してもらう。その後、合図と同時に、競技者は、このとき初めてお題を確認し、それに該当するものを探しに行く。

スケッチブックに書かれてあるお題に該当するものを見事持ってきたチームは、体育担当の2人とハイタッチして「ゴール」となる。1位から得点に加算され、全員順番がまわり最終得点の高いチームの勝利。

☆マークがついている借り物は、1つや1人しかいないものでボーナス得点となる。配点は次の通り。1位=10点、2位=9点、3位=8点、4位=7点、5位=6点、6位=5点、7位=4点、8位=3点、9位=2点、☆ボーナス得点：1位=10点、2位以下=5点



### ③ チーム対抗リレー

各チームで走順を決め、対抗リレーを行なった。

アンカーは、バンダナをつけて目印とした。チームごとに定められたコル

クボードを折り返し地点とし、1人ずつ走ってそこを往復して、次の人にバトンを渡す。配点は次の通り。1位=50点、2位=45点、3位=40点、4位=35点、5位=30点、6位=25点、7位=20点、8位=15点、9位=10点。



### 【運動会を振り返って】

Plas+のトム・オー小学校でのプロジェクトは、交通安全に関するものが中心だが、子どもたちと一緒に笑顔になれる時間も、それと同じくらい重要だと考えている。

借り物競争では、お題を、「校長先生」や、「日本人の男性」など、子どもたちが楽しめそうなお題を用意した。印象深かったのは、「水」というお題で、手で水をすくって持ってくる子どもや、ペットボトルに入れてくる子ども、自分の顔から出る汗を「水だ」と主張する子どもなど、チームそれぞれ発想の個性が光っていた。お題になったものや人を一生懸命に走って探す子どもたちの笑顔は、とても輝いてみえたし、それは交通事故から守らなければならない、とも感じた。

チーム対抗リレーでは、対抗戦にすることで1年生から6年生まで本気に

## 運動会

なって走り、みんなで力を合わせることの大切さを学べたのではないだろうか。1位のチームも9位のチームも、終始盛り上がっていたようだった。

当初の予定であったチーム対抗戦は、得点で勝敗をつける予定だった。しかし、大勢の子どもたちにそれを正確に理解してもらうことと、担当者2人での得点の管理と競技の進行を並行して、進めることが想像以上に難しかったため、途中で断念してしまった。

今回の運動会では、前回よりも運動会で使用するクメール語を覚えていたため、子どもたちとの意思疎通がうまくいった場面も増えたが、改めて言語の壁を痛感した。しかし、急な予定変更にもメンバー全員で対応でき、スムーズに競技を実施することができた。次回の渡航で運動会を行なう際は、得点の管理と競技の進行をしっかり分担していきたい。



# PART 3 シェムリアップ・ プノンペン

## ソパートさんの日本語学校

2月10日金曜日。トム・オー村を後にしてシムリアップに向かった私たちは、Plas+にとって長年の良き協力者である、ソパートさんが運営する日本語学校を訪問した。昨年の渡航の時に、ソパートさんから「来年に日本語学校を建設するよ！」といった話を聞いていたので、完成したばかりの日本語学校を案内してもらえたことは、とても光栄であった。

小学生クラスと中・高生クラスで分かれているこの日本語学校は、ソパートさんのかねてからの夢であったという。そして、ソパートさんは、学校運営だけでなく、毎日友人たちと一緒に教壇に立っているそうだ。

その日、私たちは、両方のクラスにも参加する機会を得て、一日先生となって、ひらがなの読み方や発音を、生徒たちに教えた。また、カンボジアで根強い人気のある、夏川りみさんの『涙そうそう』を披露した。



それだけでなく、小学校の生徒たちは、私たちにたくさんのクメール語の名詞を教えてくれた。また、中学・高校の生徒たちは、私たちも知っている最近のカンボジアの流行ソングを歌ってくれた。

私たちの活動をいつも応援してくれるソパートさんの日本語学校で活動させてもらえたことは、私たちにとっても忘れられない経験になった。

## PHARE THE CAMBODIA CIRCUS

2月11日土曜日。この日は、シェムリアップのホテルやお店の至るところに宣伝用ポスターや冊子が置いてある、有名なサーカス“PHARE THE CAMBODIA CIRCUS<sup>7</sup>”を今回初めて見に行った。

サーカスは、「最高」の一言だった。

舞台をぐるりと囲う造りの客席は、どこに座っても演目を間近に観ることが出来る。ハイレベルなスキルを持った演者たちが魅せる演目は、どれも感動するものばかりだった。

カンボジアらしさを含めた演目はここでしか観ることができない。これが高い人気の理由なのであろう。終盤には、会場の盛り上がりが高潮になり、最後はスタンディングオベーションが起こるほど、会場全体が感動に包まれていた。

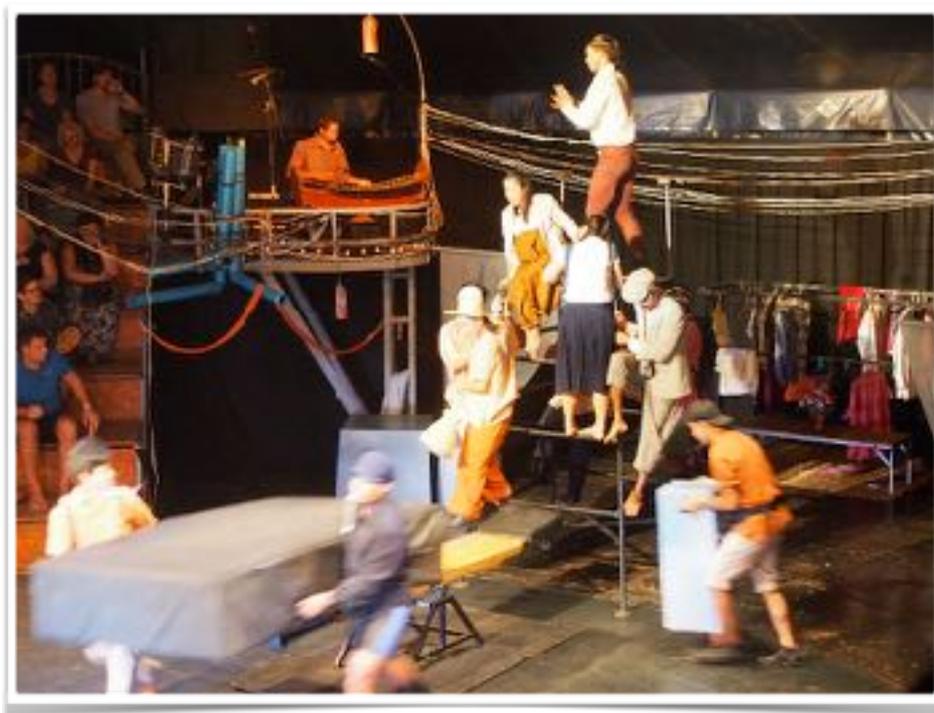
---

7

### PHARE THE CAMBODIA CIRCUS

内戦時に難民キャンプにいた青年たちが、人々を元気づけるために始めたパフォーマンスがフランスのNGOの支援により、より洗礼されたものとなり、現在はカンボジア1のサーカス集団となっている。

PHARE THE CAMBODIA CIRCUS/アンコールワット



## アンコールワット

2月12日日曜日。アンコールワット遺跡を観光。

カンボジアの象徴であり、世界遺産でもあるアンコールワットは歴史的背景を学ぶには欠かせない場所である。4年生は3回目の観光であり、2年生は初めてだった。

アンコールワットの壁には、歴史を表現した彫刻が多く見られる。そこには、仏教国ならではの閻魔大王様の地獄絵図も刻まれている。ガイドさんに説明を受けながら、カンボジアの歴史を学びつつ、世界遺産観光を楽しむことができた。



## ベンメリア遺跡、トンレサップ湖

2月13日月曜日。ベンメリア遺跡、トンレサップ湖を観光。

ベンメリア遺跡は、宮崎駿監督によるジブリ作品、『天空の城ラピュタ』のモデルにもなった場所でもあり、日本では味わうことの出来ない自然の力強さを感じられる場所だ。

また、トンレサップ湖では、水上で暮らしている人々を近くで見ることができ、異文化を身をもって感じる事が出来た。

シエムリアップでお世話になったソパートさんと、その友達のソクさんと一緒に、これらの観光地を巡り歩いた。プロジェクトだけでなく、こうした交流を通じて、ソパートさんとは、さらに仲良くなれたと感じる。ソク

ベンメリア遺跡、トンレサップ湖/イオンショッピングセンター、プノンペン大学交流会

さんとも出会えることができ、私たちの大切なカンボジアの友達が、またひとり増えた。



## イオンショッピングセンター、プノンペン大学交流会

2月14日火曜日。シェムリアップでの活動を終え、プノンペンへ。この日はイオンショッピングセンターへ観光に行った。プノンペンのイオンは、日本とほとんど変わらないが、唯一異なる点は日本製品がとても高価であることだ。また、社員の多くが日本語を話すことができ、これには私たちも驚いた。

夜は、王立プノンペン大学の日本語学科の学生たちと、食事をしながら交

## イオンショッピングセンター、プノンペン大学交流会／石原舞さんとの再会

交流会をした。彼らは日本語が流暢で、ほとんど日本語で会話をした。また、クメール語を教えてもらいながら積極的なコミュニケーションを試みた。

カンボジアの学生たちは、私たちからみても、少しシャイなところがあるようにも感じたが、日本の文化に興味を抱いてくれていることが伝わり、とても嬉しい気持ちになった。次回、カンボジアを訪れる際は、ぜひ大学を訪問してみたい。



### 石原舞さんとの再会

2月15日木曜日午前。今回は、現地でヨガ教室を開いている日本人の石原舞さんを訪ねた。舞さんとお会いするのは、Plas+のメンバーはこれが3度目となる。久しぶりの再会にメンバー全員が、大喜びだった。

舞さんには過去に、国内でイベント開催の協力をしてもらった経験がある。

## 石原舞さんとの再会／齋藤海妃さんとの出会い

1回目は、麗澤大学で舞さんの講演会を企画した。2回目は、カンボジアで活動する他団体とのコラボ・イベントに舞さんをゲストとして招待した。

そして、今回は、舞さんのヨガのレッスンを、メンバーの市川が代行させてもらえるということで、全員がそこに同行した。レッスン後には、一緒に食事をしながら、ゆっくりとお話をする事ができた。

舞さんには団体としてはもちろんだが、それぞれ個人的にもお世話になっている。人生に迷った時や何かを決断する時などにアドバイスを頂いたこともある。私たちが大学を卒業した後も、親交を深めていきたい方のひとりである。



## 齋藤海妃さんとの出会い

2月15日木曜日午後。石原舞さんからの紹介を通じて、麗澤大学OGの齋

藤海妃さんにお会いした。海妃さんは、なんと、プノンペンで繊維会社を立ち上げ、現在CEOとして活躍しているという。「プノンペンで麗澤大学のOGに会えるなんて！」と、メンバー全員が思いもよらない展開に、気分が高揚した。

当日の連絡であったにも関わらず、海妃さんは気さくに応じてくれて、様々なお話を聴くことができた。そんな海妃さんに、私たちは自らのプロジェクトである塀建設にとって最重要課題である「資金の集め方」について、相談をした。

海妃さんは、私たちの悩みに対し、沢山のアイデアを提案してくれた。海妃さんの話す実体験や、そこから生まれる発想は、全て型破りだった。私たちはこの日受けた刺激を忘れることはないだろう。

この海妃さんとの偶然の出会いには、感謝してもしきれない。海妃さんから得た貴重なアイデアを大切に、これからの活動を続けていきたい。



## タヤマ日本語学校

2月16日金曜日。この日は、タヤマ日本語学校を訪れた。

Plas+のタヤマ日本語学校訪問は、今回で2度目となる。タヤマの学生たちは、非常に礼儀正しく、日本語が上手だ。初めて訪問した2年生メンバーは、彼らの語学力や振る舞いに、驚きを隠せなかった。それに加えて、元気もよく、日本にとっても関心があり、「いつか行ってみたい」と、皆が口を揃えて言っていた。

私たちはタヤマ日本語学校では、4つのグループに分かれて、自己紹介や質問をし合いながら交流をした。

最後に、タヤマの学生たちと一緒に夏川りみさんの『涙そうそう』と、SMAPの『ありがとう』を歌って盛り上がった。すると、そのお返しに、タヤマの学生たちも、カンボジアで今流行りの歌を歌ってくれた。私たちは改めて、夢の実現のために一生懸命日本語を勉強している彼らの姿勢から、大切なものを学んだ気がした。



## くっくま孤児院

2月17日土曜日。カンボジア滞在の最終日。私たちは、NPO法人グローブジャングルのカンボジア事務所が運営する、くっくま孤児院へ行った。

子どもたちが、様々な理由で親と暮らせず、この孤児院に来たことを知った時、とても胸が痛くなった。しかし、そうした境遇にもめげず、現在子どもたちは、元気にカンボジアの伝統舞踊を習い、自分たちの力で生活するため、毎朝早起きして、勉強を頑張っているという。

私たちも、その伝統舞踊を教えてもらい、一緒に踊ろうとした。しかし、それはとても難しい動きを必要としていた。子どもたちをみると、その小さな体で、ダイナミックな表現をされていて、本当にすごいと思った。

生まれてくる環境で人生は大きく左右される、そう感じた瞬間もあった。それでも、子どもたちの笑顔を見てみると、暖かい気持ちになれた。いつも笑い声が響くこの素敵なくっくま孤児院のことを、少しでも多くの人たちに知ってもらいたいと思った。



# PART 4 メンバーの感想

## 村瀬朱里

国際交流・国際協力専攻4年



### 4度目のカンボジア

#### 【はじめに】

私にとって4度目のカンボジアだった今回の渡航は、今まで以上に特別な意味のある渡航となった。

理由は塀建設がこの渡航を機に本格的に始動したことだ。塀建設については本書の冒頭に書かれている為、ここでは割愛させて頂くが、成功すれば、私たちが団体結成当初から掲げていた“Present love to all students ～すべての子どもたちに愛を～”のモットーと出来るだけ現地のニーズに沿った活動をする事の両方が叶うプロジェクトだ。

#### 【トム・オー小学校での活動と学び】

今回は塀建設の工事が着工される前段階として交通安全に特化した出前授業や子どもの飛び出しを注意喚起する『飛び出し坊や』の設置を行なった。

出前授業では、前回までの反省を活かしクメール語を駆使し授業を行なった。クメール語は発音が難しくネイティブでない私たちが話すことはとても難易度が高かったが、紙に訳を書く工夫などをし、なんとかクメール語で紙芝居をすることが出来た。これは渡航の度に思うことだが、私たちが

村瀬朱里

クメール語を話せば話す程、子どもたちや現地の方々には喜び、信頼関係を築くことが出来る。それでも通訳がいなくては授業が成り立たないのが現実である為、引き続きクメール語の学習には励んでいかななくてはならない。

実は、今回のトム・オー小学校訪問では運動会の開催も行なっていた。昨年11月の訪問の際に子どもたちに次は何がしたいか尋ねたところ「体を動かすことがしたい！」と多くの声が上がった為、交流を目的として開催を決めた。運動会は近隣住民が見守る中、大成功に終わり、トム・オー小学校とより固い絆を結ぶことが出来た。

私はこの運動会の開催や活動全体を通し、ボランティアや国際協力活動を行なう際に最も大切なのは相手との信頼関係を築くことだと改めて確信した。大人向けの出前授業を行なった際には多くの村人たちが教室に足を運んでくれたり、『飛び出し坊や』の設置の際は子どもたちが進んで穴を掘り、汗を掻きながら設置を手伝ってくれた。更に既存の壊れた塀からのバイクの侵入を防ぐために簡易的ではあるが木の柵も作ってくれていた。これは2016年11月渡航の際に先生方と約束していたことだった。

このようにトム・オー村全体が私たちの活動に協力的でいることや自主的に行動していることは、これまでの3度の村訪問で行なってきた様々な交流が私たちと村全体の信頼関係を構築しているという証だ。

**【展望】**

私たちの活動は、塀建設プロジェクトが本格始動したといっても工事が着工した訳ではない。着工の前段階としての活動を終え、現在はこれから着工に向けての活動を行なっていくという過程だ。それでも、前段階の活動を終了させることが出来ただけでも私たちにとっては大きな第一歩だった。

「カンボジアで何かしたい！」と団体を結成し、とりあえず行ってみた1回目の渡航で「何も出来そうにない」と現実に打ち拉がれ、それでも出来ることを探す為に専門家にインタビューして周った1年間。その中で見つけた子どもたちに愛を沢山届けるPlas+ならではの出前授業。大好きなカンボジアを多くの人に知ってもらいたくて国内でも出前授業やイベントを行なった。偶然で必然に出会ったトム・オー小学校で出来るだけニーズに応えたいと渡航を重ね、「塀を建てる」と決めた。

塀建設プロジェクトを考案した傍から様々な所で批判的な意見を受けたが、それでも私たちは子どもたちに愛を届けたいと真っ直ぐ突き進んで今を迎えている。

2度の渡航の中でトム・オー小学校の先生方、業者の方々、村長、副村長、村人たちとの話し合いを行ない、この渡航で始まった塀建設プロジェクトは言ってしまうともう後戻りは出来ない。私は初めて、自分がしていることの先に待っている笑顔があることに責任と期待を感じている。

私は4日間のトム・オー小学校での活動の中で溢れる子どもたちの笑顔を見ては、絶対にこのプロジェクトを成功させてこの笑顔を繋いでいこうと決心した。

### 【最後に】

私たちの活動を応援し、協力して下さったすべての皆様に厚く御礼申し上げます。皆様の協力なしにPlas+の活動は存在せず、今はありません。皆様の期待に応えられるようにこれからも突き進んでいきます。どうか、これからも応援宜しくお願い致します。

市川舞夏

## 市川舞夏

国際交流・国際協力専攻4年

### 実りのある渡航



#### 【責任感】

今回の渡航はPlas+としても個人的にも非常に収穫のある渡航となった。個人で掲げていた目標は、塀建設の打ち合わせ・出前授業・飛び出し坊やの設置の3つのプロジェクトを成功させることはもちろんだったが、初めて現地に行く下級生たちにカンボジアの魅力を伝えることも1つであった。

カンボジアに到着するなり、すぐホテルのお迎えがこないというトラブルから始まり、村への道中に車のタイヤがパンクするなど、いくつかトラブルがあり不安にさせてしまったが、帰国する頃には「楽しかった」「帰りたくない」などと口を揃えて言ってくれたことが個人的には非常に嬉しかった。きっとこのことは上級生全員同じ気持ちだろう。

渡航する前よりもカンボジアに対する気持ちが熱くなり、今まで以上に本気で取り組んでいく下級生に期待していきたいところである。

#### 【トム・オー村でのプロジェクト】

プロジェクトでは、今回も私は運動会を担当させてもらったのだが大成功したことに安堵している。子どもたちが楽しんでくれたことが1番嬉しかったが、先生方や一緒に行ったソパートさんやソクさん、そしてメンバー全

員が楽しんでくれたことも嬉しかった。

前はまったくクメール語が分からず意思疎通することが難しかったのだが、今回はその反省を活かし使えそうな単語のクメール語は覚えておいた。その甲斐もあり、チームの子どもたちをまとめるときはスムーズに行うことができた。だが、説明のときは完全にガイドさんに頼りきっているので次回の目標としては、できるだけ自分たちの言葉で運営することを掲げたい。次回の渡航までにクメール語にも励みたいと思う。

また、個人的に印象に残ったのが飛び出し坊やの設置だ。まずカンボジア初上陸に携われたことを誇りに思う。実際に設置する際は子どもたちと名前や設置位置を決め、子どもたちと先生方と協力し、さらに村人たちにも見守られながら設置できたことに非常に喜びを感じる。おそらくそのことが、村に住む人々の中に愛着を生み、大切にしてくれているに違いない。最後に飛び出し坊やの前で記念撮影したことは最高の思い出だ。少しでも子どもたちの安全を守っていることを願う。

### 【最後に】

そして今回の渡航で改めて思うことがある。それは「カンボジアが大好き」だということ。個人としては5度目のカンボジアであったのだが、何度行っても飽きないどころか魅力を感じる。

行けば行くほど現地の方々との繋がりは深まる一方で、“いつでも帰ってくるところがある”そう思わせてくれる。

子どもたちの笑顔やカウンターパートでもあり、友達でもあるソパートさんとソクさんの言葉などから本気でカンボジアで働こうと決心することができた。毎回、愛をプレゼントしたいと思いながら飛ぶのだが、毎度たくさんの人から何倍もの愛や優しさをプレゼントしてもらっていて幸せを

市川舞夏／大久保佳織

くれる。そんな彼らやカンボジアのために数年後必ず成長して恩返しをしようとして心に誓った。

Plas+でいれるのも残り1年なので塀建設は必ず成功させることはもちろん、市川舞夏としては一生、カンボジアに愛をプレゼントし続けようと決心した。

## 大久保佳織

国際交流・国際協力専攻4年

### 今回の渡航とこれまでを振り返って



#### 【これまでの活動】

私はカンボジアに行くことは3回目になる。毎回違った感情でカンボジアを訪れるが、今回は特に特別な気持ちになった。その理由は本格的にプロジェクトに向けて大きな一歩を踏み出したからである。

私が1年生の時、Plas+を立ち上げ、知識も経験も人脈も全くないところから始まった。初めての渡航では想像していたカンボジアと全く違うことに悩んだことを今でも覚えている。

実は学校は足りていて、足りていないのは先生である。という事実を知り、さらにカンボジアは悲しい歴史がある貧しい国といった勝手なステレオタイプに私の考えは囚われていた。しかし、実際に訪れると人の心が温かく

て、幸せな国であること知った。この時から知らないうちに自分の中の偏見があることに気づき、「国際協力をしようとしている人間が何という考えをしているんだ。実際に行ってみて触れて感じないとわからないじゃないか。」という考えに変わった。

2年目では「私たちに出来る国際協力は？」を始めとして、カンボジアに携わる専門家の方にインタビューを行ない、私たちが見てきたカンボジアだけではなく、様々な分野に特化した深いカンボジアを知ることが出来た。そこで2度目の渡航で実行した『出前授業』は「先生が足りないなら私たちが先生になればいいじゃない」という考えのもと行なったものである。

これは子どもたちにとって100%の知識になって欲しいと言う訳ではなく30%の知識、30%の異文化交流、40%の夢を持って子どもたちに生きて欲しいと言った気持ちで私は挑んでいた。

子どもたちはもちろん喜んでくれてくれたが、新しく出た課題はコミュニケーションツールとして欠かせない言葉の壁と本当に現地のニーズに对应しているのかと言った問題であった。

### 【今回の渡航を経て】

その課題を抱え3年目に入り、私たちにも後輩が出来た。

今までのように自分たちだけで突っ走っていくのではなく、一緒に団体として作り上げて行くという責任感を持つようになった。

私たちの思いをしっかりと受け入れてくれて、それを発展させてくれようとする後輩に恵まれ3度目の渡航では、「子どもがボールを追って道に飛び出したり、村人が近道だと言ってバイクで校庭に侵入するから危険だ。だから「学校の周りの塀が欲しい」という真のニーズを聞いて、それにフォーカスを当てたプロジェクトを形成した。

大久保佳織

現地の業者さんと何度もミーティングを行ない、あとは資金が集まり次第、着工に入る段階まで来た。もちろん“すべての子どもたちに愛を”をモットーとして掲げている私たちはそれだけではなく、引き続き交通安全に特化した出前授業を大人たちにも行なった。もちろん子どもたちとの交流も全力で行うことが出来た渡航になった。

こうして1つの目的に向かって様々な面からアプローチをかけることが出来た今回の渡航はこれからのPlas+の大きな一歩だと感じた。私たちはもう4年生になり、残すは学生最後の1年になった。今までの3年間で精神も思考も大きく変わることが出来た。そして何よりカンボジアのことが大好きになった。

たくさんの友達も出来て、ただの「学生時代に国際問題に取り組みました。」と言っただけの気持ちではない。大好きなカンボジアに携われたことを本当に嬉しく思う。そしてこれからも全力でカンボジアに尽くしていきたいと思っている。

【最後に】

最後にこの場を借りて、今までPlas+を応援して協力してくださった内尾先生を始め、たくさんの方にお礼を申し上げたい。

ここまですっと私たちに協力をしてくださり本当にありがとうございました。こらからもPlas+は立ち止まりません！ですので、今後ともよろしくお願ひします。

## 大塚桃香

国際交流・国際協力専攻4年

### 今回の渡航を終えて



#### 【はじめに】

私自身3度目となる今回のカンボジア渡航は、個人としても団体としても1番収穫を得られた渡航になった。約2週間の渡航で感じたことは多々あるが、特に印象に残ったことが3点ある。①塀建設プロジェクトに向けて村長や先生方、村人と協力して進められていること。②子どもたちはもちろん、多くのカンボジア人とクメール語で会話できたこと。③初めてカンボジアを訪れた後輩が、カンボジアを大好きになってくれたこと。である。以上3点を順番に振り返っていきたい。

#### 【① 塀建設プロジェクトに向けて村長や先生方、村人と協力して進められていること】

私たちは学生国際協力団体として活動しているが、国際協力というのはこちらが一方的に行うものではなく、実施する場所や国などの理解がないとただの押し付けになってしまうと考えている。そのため、日本とカンボジアの国境を越えたやり取りや第3回目の渡航と第4回目の渡航とで村の関係者の方々とたくさんのお話し合いを重ね、塀建設プロジェクトを考案した。

大塚桃香

そして現在、順調に着工に向けて動き出している。このように協力して活動を進められていることを誇りに思う。

【② 子どもたちはもちろん、多くのカンボジア人とクメール語で会話が出来たこと】

今回もたくさんのお出会いがあった。私たちは“Present love to all students”というモットーを掲げているので、子どもたちと関わる機会が多くある。その中で、今まではカンボジアの母語であるクメール語はあいさつ程度しか話せなかったが、村での活動中ずっと行動を共にしていたソパートさんやソクさんから学んだクメール語を活かして、会話をする事ができ、子どもたちが何を言っているのかが、以前よりはるかにわかるようになった。言語が違えども交流することはできると言われているが、それには限界があるし、相手の言語を使用した方が相手も絶対嬉しいはずである。何より深い交流ができると思う。クメール語は難しい言語と言われているが、自分のできる範囲で勉強を続け、次回の渡航でも活かしていきたい。

【③ 初めてカンボジアを訪れた後輩が、カンボジアを大好きになってくれたこと】

Plas+として第4回目となる今回の渡航は、後輩と行く初めてのカンボジアであり、後輩にとっては初めてのカンボジアになる。渡航前まではみんなミーティングを行っていても、後輩たちはイメージが浮かばず、話についていけないことが多かったように見られた。私たち先輩がフォローしなければいけないと思っていたいながらも、完全にはフォローできなかったと痛感している。しかし、後輩たちは初めてカンボジアを訪れてカンボジアを大好きになってくれた。また、渡航したことで、イメージでしかなかった

たものが、リアルに考えることができるようになったようで、自分たちが今後Plas+としてやりたいことを提案していた。後輩たちが成長した証だろう。親元を離れる子のようにどこか寂しい気もするが、これからも“Present love to all students”の心を忘れずに先輩後輩同士で切磋琢磨しながら活動していきたいと思う。

【最後に】

上記に挙げたもの以外にも印象に残ったことはたくさんあり、私にとってカンボジアで過ごした1分1秒が宝物である。私はPlas+、何よりカンボジアが大好きだ。

そして私たちがこうして活動に取り組んでいるのは、協力してくださる方々がいるからだと改めて実感した。この場を借りてお礼を申し上げたい。

**森田遼太郎**

国際交流・国際協力専攻4年

**継続的に関わりを持つ意義と広がる視野**



【はじめに】

私はこれまで4回カンボジアを訪れた。4回目となると、不安や抵抗は最初に比べほとんどなく、これが慣れというものなのだと感じた。

森田遼太郎

2015年に初めてカンボジアへ行った時には、唯一の男子メンバーでありながら1番大きなキャリーケースいっぱい荷物に詰めていた記憶がある。それが今回ではバックパックに代わり、渡航姿も様になってきたと思う。慣れと同時に余裕や、これまで学び得たことがあった。

そのため、今回の渡航では、実際に生活している感覚を意識しながら、カンボジアの変化やこれまでに感じていた魅力、そして、まだ感じたことのないカンボジアを探すことを目標としていた。

### 【活動と学び】

私はカンボジアと出会ってから時間が流れていることと、変化していくことを意識するようになった。多くても半年に1回しかカンボジアに行けないが、行くと必ず何かが変わっている。

例えば、市場の商品の値段や街のにおい、交通量、他にもたくさんのが少しずつ変わっている。交通量が増加するにあたり、中央分離帯が増設されているなど安全を意識した動きも採られていた。この変化を見て改めて、人が誰かを思い、考え、より良い社会を作ろうとしていることを実感した。私たちの活動もその中の1つであり、最終的には他の活動も全てが“Present Love”なのだと思う。

そこで私には1つ夢がある。様々な所で、様々な人々が色様々な方法で行っている“Present Love”が1つに集まって何か大きなことを成し遂げることである。例えば、建築の学校に通っている学生に外国語学部である私がカンボジアのことを語り、そのワクワクが建築を学んだ人の心を動かして、カンボジアに雨季や洪水に対応できる建物が建つ。

このように色々な人が集まって動き出した時、きっとより素敵な世界になると考えている。この夢を見つけられたのは、カンボジアとPlas+での経験

があつてのことであり、最大の学びであり、発見だと感じている。

他方で、今回はレンタルバイクを借りて日中や夜、朝の通勤時間それぞれの時間の生活を体感することができた。プノンペンの道は複雑で一方通行が多く、迷路のように感じた。また、交通量は非常に多く、通勤時間はひどく渋滞していた。日本と比較すると信号の数が少なく、車線を意識して運転しているようにも見えず危険に感じた。実際に渋滞時は車やバイクが主張し合い、もみ合うような光景だった。

バイクで移動することで、街の雰囲気や美しさ、そして繁栄、危険さえを生活者の視点で学べた。活動エリアを広げたことで、汚染された河川やその付近に暮らす人々を目にした。急速に栄えたプノンペンの光と影を感じ、急速な発展に伴う格差を考えるきっかけになった。開発により思わぬ問題を新たに生み出してしまうことがある。

#### 【最後に】

開発や国際協力の分野で行動する上で、利益と失われていく物をしっかりと捉えることができる目を養い、思考するための知識をつけ、現地の方とともに作り上げるための言語を習得しなくてはならないのだと強く感じた。私たちの活動においても現地の方の声を大切にしながら、慎重に取り組み続けようと思う。

その中で力を貸してくれる多くの人に感謝をしながら“Present love”の気持ちを全快に突っ走っていく。活動のきっかけを作ってくれたカンボジア人の心の温かさがやはり最大の魅力であり、最高の活力である。

安部和佳奈

## 安部和佳奈

国際交流・国際協力専攻2年

### 初めてのカンボジア



#### 【はじめに】

初めてのカンボジア渡航は、食べ物も雰囲気もすべてが新鮮だった。カンボジアのバイクタクシー、トゥクトゥクに乗ったりサーカスを見たり、とても楽しく2週間があっという間に過ぎた。今回は観光都市であるシェムリアップと首都のプノンペン、拠点としているトム・オー小学校を訪れて、カンボジア人の持っているパワーや笑顔にたくさんの元気をもらった。この2週間の中で感じたことは、カンボジア人の温かさや人とのつながりの大切さだ。

#### 【活動・学び】

カンボジア人の温かさは、2週間のカンボジアでの生活で日々感じていた。ソクさんやソパートさんは勿論のこと、ホテルのスタッフ、市場で働いている方々の優しさに触れて、またカンボジアに行きたい、全力で大学生活の4年間で活動したいと強く思った。

特に村での生活がとても印象に残っている。舞夏さんと私が担当した運動会でのことだ。私が赤組の子どもたちを集めている時に、「クロホーム！（赤ー！）」と呼んでいたが、子どもたち全員には声が届かずにいた。す

ると、同じ組の子が気づいてくれて一緒に呼び掛けてくれた。この些細な優しさに、私はとても温かみを感じた。

人とのつながりの大切さは、カンボジアで過ごした最初から最後まで素敵な出会いから改めて思った。日本にいても人とのつながりは大切だと思っていたが、カンボジアに行って村の子どもたちや村のご飯屋さんなど「また来てね。」や「次はいつ来るの?」と言われて、言葉が通じないのにまた会いたいと思ってくれたことが本当にうれしく思い、胸が熱くなった。また、このつながりを大切にしていき先輩たちが築いてきたものをしっかりと受け継いでいかなければいけないと感じた。

私たちが学生であることや、カンボジアの季節などを考えると年に1・2回しか行けない。この少ない渡航の中で、Plas+と子どもたちの絆を深めていこうと思う。

この渡航でクメール語を少し話せるようになったが、クメール語で話しかけられてもまだ分からないことが多いため、今以上にクメール語を話せるようになって、村の子どもたちと仲良くなり交流したいと思った。

そのためにも、英語や第二言語を勉強すると並行してクメール語も勉強していきたい。

### 【最後に】

この2週間は私にとって、かけがえのない思い出になった。これからも拠点としている小学校の子どもたちと交流していき、子どもたちにとっても大切な思い出の1つとなるように、日々の活動に励んでいきたい！

小川龍星

## 小川龍星

国際交流・国際協力専攻2年

### カンボジアでの学び



#### 【はじめに】

今回の初めてのカンボジア渡航は、私にとってこれからの自分を作りあげていくきっかけとなった。その理由は、ショックを受けたこともあったけれど、初めての海外生活が自分の自信に繋がり、夢を見つけるきっかけになったからである。また、カンボジアで見たものはすべてが新しく、印象的であった。

#### 【活動の学び】

今回は先輩たちが以前から進めていたニーズに沿ったプロジェクトを確認することが大きな目的だった。私は、初めての海外渡航だったため、不安や期待など様々な気持ちで胸がいっぱいだった。とにかく、先輩たちに置いていかれないよう、着いていくことが精一杯で1週間という長くて短い期間を過ごした。長時間の移動や真夏のような暑さで、体調を少し崩した時もあったが、そのことを忘れるくらいカンボジアでの経験は私にとって貴重なもので、すべてが新鮮で心が躍った。特に村での生活は日本では考えられないような環境で過ごしたので非常に印象深い。

私は半年間、Plas+の活動をしながらカンボジアのことを勉強すると同時

に、英語も勉強してきた。カンボジアに行った時に、紙や画像、教科書で見えていたものが、自分の目の前で動いたり、実際に現地の人と英語を使って話すことにとっても衝撃を受けた。特に衝撃を受けたことは、自分の語学力の拙さのせいで少しも現地の人や観光客と話すことができなかったことだ。私は今までで何を勉強してきたのだろうとかなりのショックを受けたのと同時に、もっと努力しなくてはならないと思った。だからこそ、カンボジアでの数えきれない経験は僕にとってのきっかけであり、特別なものになった。

#### 【最後に】

これからもPlas+として、自分の夢を叶えるため、残りの学生生活を突っ走っていこうと思う。

※小川は今回の渡航に参加していないため、その視察を目的とした前年11月の第3回渡航の感想を掲載。

## 小田嶋優花

国際交流・国際協力専攻2年

### 初めてのカンボジア渡航をして



#### 【はじめに】

私は、初めての海外をカンボジアで約2週間Plas+のメンバーとして活動した。カンボジアの首都プノンペンから車で約5時間かかるトム・オー村の

小田嶋優花

トム・オー小学校へ行った。ゼミでの話し合いでトム・オー小学校の話が出てきても想像できずついていけなかったが、今回の渡航で念願のカンボジアへ行けてとても嬉しく思う。

【活動と学び】

正直私自身、初海外で猛暑の国へ行き、生活できるか心配だったが周りのメンバーや現地の方々にサポートされながら生活できた。トム・オー小学校で三日間活動していたが決して裕福とは言えない生活の中でも、笑顔を絶やさず純粋な子どもたちを目の前に私たちは逆に笑顔をもたらした。3日間と少ない時間で子どもたちと交流したがとても濃い時間だったと思う。

活動内容は、子どもたちが安全に学校で学べるようにと交通安全に関する授業をしたが、子どもたちは真剣に話を聞いてくれたし、運動会を行った際にも楽しそうだったのでよかったと思う。

また、1番印象に残っているのが2つの飛び出し坊やの名前を決めて設置したことだ。二人の「飛び出し坊や」の名前は、「ソンハーくん」と「しんちゃん」と名付けられたが、子どもたちはとても可愛がってくれていた。そんなかわいい子どもたちとの別れはとても悲しかった。来年もまた行きたいと思っている。子どもたちの成長を楽しみにしている。

その他にも世界遺産のアンコールワットや孤児院、日本語学校に訪問したり、現地の食べ物を食べたりしたが、見るもの感じるものすべてが新鮮だった。その中でも衝撃的だったことは、トゥールスレン博物館を見学したことだ。写真やビデオを見たことではその場所については知っていたが、実際に行ってみると言葉では表せないくらい悲惨なものだった。発見当時のまま保存されていた拷問室は血の跡がまだ残っていた。私よりも小さな子どもたちの写真が数えきれないくらい貼ってあり、罪のない子どもたちが

殺されていたのだと思うと涙が出そうになったのを今でも覚えている。

【最後に】

Plas+に入るまではこんな残酷なことがカンボジアで起こっていたことを知らなかった。先輩たちと一緒にカンボジアに行ったことにより私自身の視野も広がりとても素敵な体験ができた。これからは私たち2年生がPlas+を引っ張っていかねばならないという自覚を持ちながら、カンボジアの子どもたちに愛を届けていきたい。

## 谷内うらら

国際交流・国際協力専攻2年

### 初めてのカンボジア渡航を終えて



【はじめに】

Plas+に所属してから数か月、カンボジアについて調べ、先輩方と活動を行う中、知らないことだらけでイメージが湧かず、話を聞きついでいくのが精一杯となっていた時期があった。必死に活動を続け、待ちに待った2月渡航。「やっと自分の目で見ることができる」と思うと渡航計画、出前授業の準備にも自然と力が入った。

いざカンボジア・プノンペンに降り立った時、私のイメージしていたカンボジアとは違った。栄えた街の煌びやかな様子や立ち並ぶビルに驚いた。

## 谷内うらら

この衝撃から2週間の渡航が始まった。

### 【活動・学び】

街を離れ、拠点とするトム・オー村へ向かうため、準備した物を積み込み整備のされていないぼこぼこの道をひたすら進んで村に到着した。

着いてから村長、先生方とのミーティングを行い、直接お話しを聞くことで塀の建設を本当に望んでいることを再確認し、翌日に控えた出前授業が重要なものになると確信をした。2日にわたり行った出前授業では溢れんばかりの笑顔と、元気に走り回る子どもたちの姿から、とてつもないパワーを感じた。今回の出前授業を通してトム・オー村の子どもたちの心に残るものが何かあったら嬉しい。今回初の試みであった大人向けのセミナーにも多くの村人が足を運んでくださり、私たちを迎え入れてくれ、トム・オー村の温かさを感じた。

村を離れ、今後活動を続けるは欠かせない文化・歴史を学ぶためベンメリア遺跡、アンコールワット、トゥールスレン収容所博物館などを訪れた。大切にされてきた文化、絶対に忘れてはいけない歴史背景、実際に自分の目で見て肌で感じて、インターネットで調べただけでは知ることのできない体験をし、改めてカンボジアという国について考えるきっかけとなった。

### 【最後に】

今後は現地の人とよりスムーズなコミュニケーションをとるためにクメール語の学習をすること、カンボジアの魅力を伝える国内活動も視野に入れ活動を行っていききたい。

今回の渡航で活動を行うにあたり沢山の方々に出会い、協力して頂いた、感謝の気持ちを持ってこれからも活動を続けていききたいと思う。

# PART 5 おわりに

## 今後の展望

Plas+として4度目の渡航、そして新メンバーを加えての新体制Plas+としては初めての渡航であった今回は、団体としても、個人としても、非常に実りのある渡航だった。

上級生は、初めて下級生を海外に連れて行くことに、各々責任を感じていた。いつも以上に、リスクマネジメントには敏感になって行動し、常に注意喚起を行っていた。なにより、下級生にとって初めてのカンボジアだったため、心から楽しんでもらいたい、好きになってもらいたい、という一心だった。下級生も、1年間蓄えてきたカンボジアの知識を、実際に五感を使いながら、照らし合わせているようだった。これまで学んできたものを存分に活かし、さらに上級生にはない新しい視点からカンボジアを見て、気づきを得ていた。

この約2週間の渡航を通して、知識・経験を得たのはもちろんのこと、最大の収穫は、Plas+の団結力だったのではないだろうか。

それぞれが様々なものを吸収し、考え、感じたことによって、新しく挑戦してみたいことが広がった。現在行なっている塀建設の継続はもちろん、下級生からは、新プロジェクトを考案しようという動きも活発になっている。これからもPlas+は様々なことに挑戦していくが、この渡航を通して全員が再認識したのは、私たちPlas+のモットーである、“Present love to all students～すべての子どもたちに愛を～”という軸は変わらない、ということだった。何をやるにしてもこの想いだけは忘れずにしようと思っただけだった。今回、様々な面で一步前進することができた。同時に、原点に戻り、チームとしての結束を確かなものにできたとも感じている。

そして、これからのPlas+は、『トム・オー村における安全な学び場づく

り』の最終段階となる塀の建設を実現するため、団体の周知と資金集めに邁進していく。2018年の2月に塀の完成式を目標に、全員で力を合わせて突っ走っていくつもりだ。

また、2017年度に入って、新たなメンバーの募集も積極的に行い、団体としての可能性も広げていく。徐々に、団体の運営も2年生中心になっていくことだろう。一貫性と柔軟性、両方のバランスをとりながら、国内外での活動を続け、愛をプレゼントする気持ちを忘れないでいきたい。

最後になりますが、この場をお借りして、日頃からPlas+の応援をして下さる皆さま、活動に協力して下さる皆さまに、心からの感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

まだまだ未熟なPlas+ですが、これからもご指導と応援をどうぞよろしくお願い致します。感謝の気持ちを忘れずPlas+はこれからも活動に励みます。

Plas+

## 2016年度 カンボジア 現地活動報告書

---

Plas+ (Present Love to All Students)

本文：市川舞夏、大久保佳織、大塚桃香、村瀬朱里、森田遼太郎

安部和佳奈、小川龍星、小田嶋優花、谷内うらら

表紙・デザイン：別府拓也

編集・発行責任者：内尾太一（麗澤大学外国学部講師）

連絡先：tuchio@reitaku-u.ac.jp

印刷所：ちよ古っ都製本工房

発行日：2017年6月10日

Plas+ ホームページ：<https://rtk-plas.jimdo.com/>

Plas+ Twitter：@plas\_reitaku